

ノスタルジィの涙

宮原朱末 — カフェ店主

『木を植えた人』 ジャン・ジオノ



もう、ほとんどの人々が語るこのできない第一次、第二次世界大戦を背景に、計り知れないやさしさと静けさを称えた（慈愛ですね、もはや）エルゼアールおじさん。おじさんは、奥さんと息子さんを亡くし南仏プロヴァンスの山中で暮らしていたらしく、何をしてたかという、羊飼いをしながら荒野にブナやナラの樹を植え続けて、大自然を復活させたって…お一人で。まあ、傍らにいる牧羊犬にも支えられていたのだらうと思うけれど。それにしても、単位がね。せいぜい何百という苗の数かな？と思うでしょ？一人でコツコツとやってるし。…10万というドングリの実を植えて、そこから2万本の芽を出させたということです！

現代社会では、とうていできないし…

なにかちがう境地にいないとむつかしいことですね。

生涯をプロヴァンスのマノスクという地で、木が虫にやられようが森林伐採の憂き目に合おうが(昔は燃料としても重要でしたから)、淡々と同じように植え続けたエルゼアールおじさん。

“ひたすら無私に与えつづける寛い心”

“この人がくじけたり、疑いを抱いたのを見たこともない”

この言葉を読んだときに、ブルゴーニュやローヌアルプに居たときの、大きな自然の流れとゆったりとした歩みが一体となり日常に静かな緑のほほえみを感じ、あまりにも優しくすぎるから、在るだけで優しくすぎるから、涙がでちゃった記憶、すべてが赦されあたたかく包み込まれる、鼻のおくがツーンとしながらなぜか懐かしさがこみ上げてくる。そんな記憶がフワッと身にあらわれてくるのです。

さまざまな都会にいと、欠けていること必要なことは大自然に足を向けると教えてくれるから…そんな草臥れた心が癒される。

何かを真摯な気持ちで続けていくこと、インターネットの情報にとらわれず、人が本来の人間らしくいられることって、いつも考えさせられるのだけれど、すこし迷ったらこのおじさんの暮らしの一部を思い出すといいかもしれない。

そこには変わることもない本当のやさしさと美しさ、静けさと強さがいてくれるから。☺